
双銃の異世界人

雨流 光希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双銃の異世界人

【Nコード】

N4703Z

【作者名】

雨流 光希

【あらすじ】

両親おりつきとが居ないながらも、平凡な生活を送っていた高校一年生、式織しき 月斗

彼の生活は、一通の送信者不明のメールにより大きくその人生を変えられた。

良い意味でも悪い意味でも大きく。

プロローグ

スマートフォンを操作しながら帰路につく。季節は冬。まだ午後六時前なのに、辺りはすっかり暗くなっていた。

（少し図書室でゆっくりしすぎたかな。でもあの小説は面白かったな）

そんな事を考えつつ彼、式織 月斗は少しだけ歩調を早めた。制服の上にダッフルコートを着ているとはいえ、さすがに寒い。ぶるるっ。

短く震えスマートフォンが手の中でメールが来た事知らせる。

（ん？なんだこれは）

メールには送信者のアドレスがなかった。

本文だけの簡素なメール。そこにはこう書かれていた。

『このメッセージを受け取ったあなたにお願いがあります。

私達を助けて。聞き届けてくれるなら、この言葉を唱えてください。ゲートオープン』

悪戯にしても凝ってるな。最初に抱いた感想はそんなもんだった。ただアドレス無しでメールが着たことに戸惑った。もし本当に助けを求められていても、連絡の取り様がない。

本当に信じていたわけではないが、先程読んでいたファンタジー小説の影響もあるだろう。歩く足を止め、月斗は声に出してみた。

「ゲートオープン」

冷たい風が顔を撫でた。目で見た限り周りの景色に変化はない。

（やっぱり悪戯だったのか、なんと手の混んだ）

そう思い再び歩き始めようとした所で、世界は変わった。周りの景色が月斗を中心に回り出す。次第に回転の激しさを増し、狭まって行く。

「まてまて、現実的に考えてありえないだろ！なんだよ。これ？」
あまりの事に戸惑い、答えが返ってくるはずもない問いを口に出す。
その間も回る景色は狭まり続け、あと数センチで接触するという所
で月斗は意識を失った。

ファンタジー世界

「ね・・・ねーいき・・・」

身体を揺さぶられる感覚と共に頭の上から、声を掛けられているようだ。

どうやら意識を失ってしまったらしい。月斗は軽い頭痛に顔をしかめながら、目を開けた。

「ねーってば、生きてるの？」

「ああ、大丈夫だ」

まだぼんやりとしか見えないが、相手は少女のようだ。反応があった事に安心したのか、その子は近くにあった椅子に腰かける。

「よかった。せつかく呼んだのに動かないんだもん。失敗したのかと思って心配したわ。身体は動く？」

頭痛も消え、視力も戻ったようなので、月斗は立ち上がる。目の前にいた子はとてつもない美人だった。背中の中ほどまで伸びた水色のロングヘアーに、同色の快活そうな瞳。胸は控えめだが、スレンダーなスタイルは、異性、同性共に惹きつけるオーラが漂っている。見た目には同年代に見えるが、フリフリしたロリータファッションの為、年下にも見える。辺りを見回すと豪華な家具の置かれたレング作りの部屋だった。

「身体は平気だけど、呼んだって？学校の近くに居たはずだけど？」
一瞬、目を奪われてしまったが、月斗は少女に疑問を問う。

「あら？メッセージにあったはずだけど？助けてくださいって。一応説明しておくけど、ここはヴィラルよ。貴方は私のメッセージに答えたから、ここに來たってわけ」

少女は薄く笑う。妖艶な笑みだが、服のせいで少女には似合わない。
「はっ？あれはマジだったって事か！夢なら冷める起きるんだ俺！」
少女に言われた事を急には信じられず、取り乱す月斗。

「これで信じられる？」

少女は右手をグーにした後、人差し指を伸ばす。

「なっ」

月斗は驚愕の表情を浮かべる。

少女の人差し指の先には、水が球体になり浮いている。

「信じて貰えたかしら？そろそろお互い自己紹介しましょう。私はアリス・Ｌ・レリスティア。レリスティア皇国第三皇女よ。よろしくね」

少女改めアリスは水球を消し、右手を差し出す。

「式織 月斗」

いろいろあつて頭のキャパシティがパンク気味な月斗は、そういつて手を握るのが精一杯だった。「来てくれてありがとう。感謝するわ」

見るものを魅了する笑顔でアリスは礼を述べる。

「いや、一つ学んだよ」

ふーとため息をついた後のように見える顔で月斗は頭を掻くそぶりをみせた。

「なにをかしら？」

「世の中には理解できない現象があるってことをさ」

「そんなの当たり前じゃないの、だから世界は面白いのよ？」

アリスはクスクスと今にも笑いだしそうな笑みを浮かべる。

「世界は面白いか・・・ま、つまらないよりかはマシか」

ダッフルコートのポケットに手をつっこみ月斗も笑みを浮かべる。

アリスの視線が月斗の全身を見るように動く。

「もう体調にも問題ないみたいだから、本題に入るわね。とりあえずそこに座ってくれる？」

アリスに言われ、月斗も椅子に腰掛ける。

「助けてとは書いたけど、事態はそこまで切迫しているわけではないの。でも近い内に何かしらの動きはあると思うの」

「いや、なんだそれ。遠回し過ぎてわからないって。俺に出来る事なら、協力するが、具体的に何をすればいいんだ？」

本題に入るといいつつ、アリスの物言いに首を傾げる月斗。一国の皇女の要請に一高校生の月斗が役にたてるような事とは、月斗自身思わなかったが、詳細を聞かない事にはどうしようもない。

「ヴィラルには四つの国があるの表面上は仲が良さそうに見えるんだけど、隣国のリンドベルに、不穏な動きがあるのよ。新たな魔道兵器の開発も確認されているわ。私が貴方と呼んだのは、戦争にならないように抑止力として、それと考えるだけじゃないのだけれど、戦争がもし始まってしまった時は切り札としてよ。異世界からの召喚は私の国だけの秘術だから」

「なっ、そんな俺に出来るわけないだろ」

絶句しそうになったが、なんとか月斗は、口から言葉を出した。月斗の言葉にアリスは小さく頭を振り、真剣な眼差しで月斗の目を見た。

「今のままの貴方じゃ確かに難しいかも知れない。いえ、無理といつてもいいわね。でも、貴方はまだ精霊との契約をしてないし、どうなるかは誰にもわからないわ。伝承によると異世界から来た者は偉大な功績を遺した者だけじゃないみたいだしね。この世界の者より精霊に好かれる体質みたいで、並の術者以上の力を得るけれど、振り幅は広いみたいなの」

アリスは苦笑を浮かべながら説明をした。異世界から来た月斗にとって精霊なんてものは、ゲームか小説の中でしか馴染みのない存在で、貰える力の大小自体、想像するのが難しい。

ファンタジー世界2（前書き）

PCから打つのに変えたため、漢数字と数字が混合になったりしちゃってます。すみません。

ファンタジー世界2

「さて、でわ、簡単な説明も終わったことだし行きましようか」

素晴らしいアリスはテーブルの上にあるガラスの様な素材でできた小さいながらも高級品だと見るからにわかる細工のされた小さなハンドベルを鳴らす。チリーンと涼しげな音が部屋に響く。

コンッコンッ

ハンドベルが鳴らされ一分もしない間にノックの音がする。

「入りなさい」

「失礼いたします」

アリスが入室を促すと、落ち着いた雰囲気メイド服を着た黒い髪の毛のショートカットの女性が入ってくる。アリスより少し身長は高く160センチぐらいだろう。年頃は二十代前半といったところか。アリスとは違い大人な女性といった感じた。

「客人が目覚ましたわ。コレン儀式場は使えるのかしら？」

「すでに準備済みでございます」

コレンと呼ばれたメイド服の少女はアリスの問いに背筋を伸ばし答える。

「よろしい。さ、行くわよ」

（メイドさんとかコスプレ以外で初めて見たよ。ま、それを言うなら皇女もだけど、やっぱり本物って感じるな）

二人を見てそんなどうでもいい事を考えている月斗。

「ちよつと、話聞いているの？」

「うわっ、なんだよ」

いつの間にか結構近づいていたアリスの顔に驚き、顔を背ける月斗。

「はーもう、コレン連れて来て」

アリスはそう言う椅子から立ちスタスタと歩いていく。

「かしこまりました」

了解の意を示し、コレンは月斗の左肘をひっぱり月斗をたたせ、ま

るで恋人同士のように腕を組みアリスの後に続く。コレンのモノが腕に当たる感覚。しばらく月斗は放心状態になったため、引かれるままに歩く。部屋を出、しばらく廊下を歩くとやっと思考が回復した。

「ちよつ、これは」

「良いからついてきなさい。貴方は私の話を聞かないみたいだしね」
「悪かった」

さすがに自分が悪いとわかっている為、月斗は素直に謝った。

「コレン」

アリスが名前を呼ぶとコレンはすぐに腕から離れていく。名残惜しいが正直いっぱいいっぱいになってしまっ為、月斗は、ほっとした。「ついたわ。コレン、月斗も反省したみたいだしもう下がって良いわよ」

「はい。失礼いたします。アリス様、月斗様」

「あ、どうも」

コレンは一礼し去っていった。アリスの前には一際頑丈そうに作られた扉がある。どうやらここが儀式場と呼ばれる場所のようだ。くる途中に見た扉は大体木できていた為、月斗は胸に不安を抱いた。「さつき…話した精…霊との契約だけ…どね」

アリスが鉄の扉を押しながら話すが重いのか中々開かない。コレンさんにあけてもらえばよかったんじゃないか？と思いつつ、アリス一人では開かないようなので、月斗もともに押すと扉は簡単に開いた。扉の先には長い階段が見える。

「はあ、はあ、ありがと」

息を乱しながら、アリスは礼を口にする。

「いや、気にすんな」

常套句だが、実際扉を開けたただけなのでそう返す。

「とりあえず、ふー、今から契約してもらっから」

「テンポよすぎだろ！」

思わずそうツツコンでしまった月斗を誰も攻める事はできないだろ

う。

「でもね、この世界で生きていくには必須よ？彼らの恩恵はすごいんだから、魔法を使えるかどうかは素養の部分があるけれど、契約しない事には素養があっても初級呪文され効果を示さないんだから」「それなりに重要ってのはわかったんだが、俺も当てはまるのか？というか、この世界じゃない人間にも魔法は仕えるのか？」

答えはわかってはいたがささやかな時間稼ぎとして言ってみる。何事も心構えというものは必要だ。

「当たり前じゃない。魔法が使えないんならわざわざ異世界の人間呼んでどうするのよ。魔法の適正、まあ、魔力ね。この世界にも高い人は少しは居るけど多く見積もっても全体の4割ぐらいなのに対して異世界の人間は間違いなく高い魔力をもっているの。こんなところで話し込んでも仕方ないし、そろそろいくわよ」

そっつい歩き出したアリスの前に光を放つ白い玉が浮かび、薄暗い階段を照らす。アリスに続き観念した月斗も階段を下りていった。

ファンタジー世界3

階段をアリスに続き階段を十メートル程降りると、一辺が十五メートル程の四角い部屋についた。部屋の奥には石で出来た台座があり、床には巨大な円が描かれている。

「その魔方阵の中心に立ちなさい。さっさとすましちゃいましよ」

「なんか怖いんだけど…爆発したりしないか？」

「爆発なんかしないわよ」

月斗の問いに少し飽きたようにアリスは答える。

「いや、だってさ。いきなり異世界につれてこられて簡単な説明しかうけず、魔方阵の中に立てとか、不安に思わない人間の方が珍しいと思うんだが」

「あーもうめんどくさい男ね。いいからさっさと終わらせるわよ。後でもうちよつと説明するから」

アリスはぐずる月斗の手を引き魔方阵の中央まで連れて行く。アリスに手を握られ、今まで女性と付き合った事のない月斗それによって黙ってしまう。

「やっと観念したわね」

アリスは魔方阵の中央に月斗を残し台座の方に歩いていく。途中服の裾を踏み転びそうになっていた。

こちらを振り向くアリス。心なしか頬がうつすらと赤く染まっている。おそらく羞恥のせいだろう。

（本当に大丈夫か？）

そんなアリスを見て、手を離され冷静になった月斗の中は不安な気持ちでいっぱいになる。

（まー、一応悪い人間には見えないんだよな。性格なんてものはぱっと見わからんが、少なくとも悪意は感じられないし、第一俺を騙す利点が何も思い浮かばんしな）

そんな事を考えているとアリスは台座にたどり着き、手を当てていた。

「はじめるけど、注意点がひとつだけあるわ。精霊を怒らせないでね」

「わかった」

何を言ってもアリスは反論を認めず、さっさと契約を行いそうなので月斗は素直に頷いておく。下手に反論し、必要な情報を言ってもらえないなんて事になったら、身の破滅だ。

「偉大なる始祖の精霊よ。我は願ひ訴える。ここに居るものに精霊に連なるものの加護を与えたまえ、この世界に生きるすべてのものに祝福を」

アリスが真剣な表情で言葉を紡ぐ。アリスの言葉に呼応するように足元の魔方陣が赤、青、緑、茶と色を変え光を放つ。アリスはまだ真剣な顔をし、月斗を見ている。

「あら？おかしいわね」

「なにが？」

足元の光に十分びつくりしている月斗であつたがアリスが真剣な表情を浮かべている為、まだ何か起きるようだろうに考えていた月斗の耳に届いたのは、アリスの困惑した声だった。

「普通なら、精霊が姿を見せるはずなんだけど、下級精霊すら現れないなんて」

「ふーん」

精霊が姿を見せない事の異常差がいまいちわからない月斗には、事の重大さ差がわからない。

「精霊が現れない事の重要性なんてわからないか、着たばかりだししょうがないわね。この世界では生まれてからすぐに精霊との契約をするの。それによってこの世界での干渉力が決まるわ。干渉力の大小にかかわらず生活が便利になるから、やらない者はまずいいわね」

「説明されてもぴんと来ないな。まだこの建物から出てないし。単

純に、これが壊れているんじゃないのか？」

そう言い月斗が屈かがんで魔方阵に手を当てると、変化が起こった。茶色い光を放った後、沈黙を保っていた魔方阵から溢れんばかりの白い光があふれ出した。

「ちよつ、おい！これどうなってんだ？」

「ごめん。わかんない」

そう答えたアリスはちゃっかり台座の後ろに隠れている。小柄なアリスの姿は台座に隠れてこちらからは見えなかった。次第に光の量が増していき目をあけているのが辛くなった為、月斗は目を閉じた。

ファンタジー世界4

「なによ。これ」

光によつて奪われた視力が戻りつつある月斗の耳にアリスの驚いた声が聞こえる。声の雰囲気から察するに、相当予想外の自体が起こつたみたいだ。

「なに？どうかした？」

「あんた、何したのよ！というか落ち着きすぎ、まさか狙つてやったの？この変態！」

もうすでに自分の手には負えないことを自覚した月斗の声は投げやり気味で、それを聞いたアリスはあらぬ誤解をしていた。月斗はやれやれつといった風に肩を落とす。

「いや、落ち着いてるんじゃないやなく諦めただけ、なにが起きようと俺には対処のしようがないし、この世界に来たばっかの俺に何かを、というか魔法絡みの事を狙つて出来るような事があるか考えてくれないが起きたのか聞きたいのは、俺の方だし、アリスがわからない事の答えを持つてゐるわけないだろ？それと変態つて何のこと？」

「それよ、それ」

アリスは疲れた顔を浮かべ月斗の足元を指差す。頭の中にハテナマークを浮かべる月斗。それと言われても、この部屋にはアリス、月斗、台座、魔方陣後は明かりを灯す松明たいまつしか無い筈である。アリスが驚くようなものは無い筈だった。この世界に着てから驚きっぱなしの月斗であつたが、足元に視線を落とした月斗は、今までの驚きが可愛く思える程に驚いた。

「どこから来たんだ？」

アリスが変態と言つたのも納得である。今まで居なかつた者が居て、さらには主導権を握っている自分がおこした事ではないのだから。アリスの視線の先、つまり月斗の足元には、月斗を囲うように丸くなって二人の少女が眠っていた。年頃は十代前半といったところか、

身長は丸くなっていてわかりづらいが140センチといったところだろう。双子なのかそっくりで、違うところといたら、髪の色と服装か。一人は白髪、白いフリルのついたワンピース姿。一人は黒髪、黒いフリルのついたワンピース姿と、二人とも薄着だった。

「それはこっちの台詞だつての！」

（口調が変わってるぞ）

さすがに口に出したら怒られる事ぐらいは空気を読んでわかった月斗は心の中で呟いた。

「この子達が精霊なんじゃないのか？」

状況的にそう考えるのが自然だと思い、月斗はアリスに問うもアリスの答えはすぐに返ってこない。

「こんな精霊見たことないわ。それに高位の精霊は人型がいるにはいるけど、見た目まったく人間な精霊がいるなんて話聞いたことないし」

多少落ち着いたのだろう。動揺してるのは伝わるが、アリスの口調は戻ってきていた。

「とりあえず、アリスにもわかんないならお手あげじゃないか」

「うーん。王宮図書館にでもいけば何かわかるかもしれないけどね。古い時代の文献もあるし」

右手を額にあて考えるような仕種を見せるアリス。どうやらすぐには調べられないらしい。

「ここから近いんじゃないのか？王宮図書館って言うぐらいだし」

王宮から離れてたら、王宮図書館って名前つけるなよと思いつつ、月斗は口にしたがアリスの表情は思わしくない。

「ここから王都まで何日かかると思ってるのよ」

月斗とアリスの会話がかみ合っていない。

「いや、だってアリスって皇女だろ？王都にすんでるんじゃないのか？というかここは王都じゃないのか？」

「皇族がみんな王都に住んでたら大変よ。私には興味ないけど後継者争いとかあるし」

「あー、やっぱそういうのあるんだ。王都じゃないってのはわかったけどさ。それならどうする？起こしてみるか？」

「それしかないわね」

「じゃあ、俺が起こすからなにかあつたら頼む」

結局その結論にたどり着いた二人は、寝ている少女二人を起こすことにした。なにかあってもいいように、魔法が使えるアリスは後方に下がってもらい、月斗は少女達を起こす為、二人の少女を見る。すーすーと寝息を立てて寝ている二人の姿に頬が緩みそうになるが、なにが起きるかわからない為気を引き締め、二人の少女を揺すった。

ファンタジー世界5

「おい朝だぞー」

月斗は控えめに二人の少女を揺すってみる。

「朝だぞつて」

「定番だろ？」

アリスから駄目だこいつオーラが漂ってくるが月斗は受け流す。スマートに異性を起こせたら生まれてからずっと彼女が居ないなんて事にはならなかっただろうとか、どうでもいい事を考えながら揺すり続ける。

「「んん」」

反応はあったが、少女達は打ち合わせでもしてるんじゃないかと疑ってしまふ息があつているみたいだ。同時に月斗の手を払いのける。「もつと強く揺すりなさいよ」

月斗が困った顔を浮かべると、アリスからはそんな言葉が飛んできた。女性に免疫がない月斗としては、少女とはいえ触れ続けるのに抵抗があつたが、そんな事言える様な状況じゃない為、素直に頷き先ほどもより強めに揺する。

「起きろー」

先ほどより若干強めに揺すりながら声をかける。

「ふあー。何？どうかしたの？」

先に起きたのは、黒髪の方の少女。身体を起こしながら、白髪の少女に話かけているようだ。

「んん、私じゃないいよ？」

眠そうに目を擦りながら白髪の少女が返事をする。

「ここには私達しかいないでしょう？つてここどこよ」

そついい視線をあげた少女と黒髪の少女と目があつた。

「よう」

警戒心を与えないように笑顔で話しかけるが、たぶんきこちないだ

ろくなーつと頭の隅でどうでもいい事を考える。

「え？なんで？」

黒髪の少女の声によって何かが起きてる事に気づいた白髪の少女も目を擦るのをやめ、月斗の姿を見ている。

「あれ？」

彼女達の表情からは、驚きと戸惑いが読み取れる。ありえない事が起こった時の表情。だが、すぐにその表情はひっこんだ。

「まさかこんな日が来るなんてねー」

黒髪の少女が、すこしだけ嬉しそうに言う。

「ふふ、まさか二人同時に呼ばれるなんてね」

白髪の少女は満面の笑みを浮かべている。

「普通の女のこにしか見えないわね」

危険はないと判断したのかアリスが近寄ってくる。どこからどう見てもアリスの言うとおり、普通の少女にしか見えなかった。

「はじめてまして。ご主人様」

アリスと月斗が、うーんと頭を抱えて考えていると少女二人が月斗を見上げそう口にした。アリスからは非難の視線。

「ごめん。そう呼ばれる意味がわからない。なんで俺がご主人様なの？」

アリスの視線がきつくなる前に、月斗は少女二人に質問してみる。

「だって、私達はあなたの魔力に惹かれてここに居るのよ」

「じゃあ、契約は失敗してなかったって事？」

黒髪の少女にアリスが問うと二人の少女は同時に頷いた。

ファンタジー世界6

少女達が頷くと、アリスは頭を抱えた。

「はぁー。どんだけ企画外なのよ。貴方は」

「そんな事言われてもな」

「もういいわ。さっさと契約しちやいなさい」

そついうと、アリスは月斗に短剣を差し出す。

「これで何するんだ？」

「血を与えるのよ。少しでいいから、指でもきって」

「了解」

短剣を鞘から抜き、左手に持つ月斗。だが、右手に刃を当てようとすると、白髪の少女に左手を掴まれ短剣を奪われる。

「私達、血なんかいらないよー」

「そうなん？じゃあ、どうすればいい？」

そんなやりとりをしていると、黒髪の少女に右手を掴まれる。

「しゃがんで」

助けを求めるようにアリスを見ると、もう好きにすると、さじを投げていた様で何も言わない。仕方ないので、黒髪の少女に言われたように、月斗はしゃがむ。少女達は月斗の手を掴んだまた頷きあった後、月斗の頬にキスをした。

「なっ」

「これで契約終了ですよ」

満面の笑みを浮かべ言う白髪の少女。

「よろしくね」

無表情でいう黒髪の少女。まるで、何もなかった様に告げる少女達。月斗は羞恥で、頬が熱くなっていく。

「もう疲れたわ。戻ります」

面倒になったのか、本当に疲労かはわからないが、アリスはそう言う階段を登って行く。

「ちよつ、待てつて。俺を置いてくな」

慌ててアリスを追う月斗。

「慌ただしいわね」

「そんな事いつてる間にどんどん行っちゃうよ！ご主人様待ってー」

「はぁ」

更に月斗を追って少女達は階段を登って行った。

ファンタジー世界7

ぼふぼふぼふ

「はぁー」

アリスは部屋に着くなりそんなため息をついた。

ぼふぼふぼふ

「なんだか疲れてるな」

「誰のせいよ……」

ぼふぼふぼふ

アリスは肩を落としテーブルにつつぶした。

ぼふぼふぼふ

「やわらかいねー。よく跳ねるよー」

「ん」

アリスのベッドからそんな声が聞こえてくる。先ほどから部屋に響く音の原因だ。

「貴方たちはなんで契約終わったのに、ここにいるのよ？もうベッドで跳ねるのはやめてこっちにきなさい」

「えー、まだやるの」

「やりたい」

アリスの言葉に二人の少女はそう答える。

「すまんがこっちにきてくれ」

「はい」

「わかった」

月斗の言葉には素直に頷き、テーブルまで歩いてくる。

「それでさっきの質問の答えは？普通契約が終わった精霊はそのまま精霊界に帰るはずだけど？精霊界からこっちに力を供給したり、魔物の活動を鈍くしたりいろいろ仕事があるでしょ？それと名前は？」

「んー。私達との契約は他の精霊とは違うんだよ。私はフェル」

「専属契約。ファー」

アリスは二人の話を聞いて考える仕種を見せる。

「知らないわ。でも、月斗からは魔力を感じるようになったし契約は成功してると考えてよさそうね。今日はもう駄目。考えるのも驚くのものにも疲れちゃったわ。夜も遅いし、部屋用意させるから、今日は月斗も休んできて」

「了解」

チリーン。

コンッコンッ

ハンドベルの音が部屋に響くと、すぐに扉にノックがされ、コレンさんが部屋に入ってくる。

「お呼びですか？」

「月斗を部屋に連れて行つてあげて」

「この方たちはいかがいたしましょう？」

フェルとファーを見て、少し驚いたような表情をしたがすぐに真顔に戻る。

「気にしなくて良いわ。どうせ好きに思うから」

「かしこまりました。でわ、ご案内いたします。ついてきてください」

丁寧なお辞儀をされ思わずお辞儀を返しそうになる月斗。そんな様子を見ても、ポーカーフェイスを貫くコレンさんが月斗にはメイドのプロに見えた。

ファンタジー世界8（前書き）

ちょっと話の進むペースあげましょうか。

ファンタジー世界8

コレンに案内された部屋もアリスの部屋に負けず劣らずといった豪華さだったため、庶民な月斗にはくつろぐ事ができるか不安だったが、ベッドの中に入り目をつむると、すぐに眠気が襲ってきた。両隣からはフェルとファアの寝息が聞こえたため、それにつられたのかも知れないなどと考えていると月斗の意識は途絶えた。

「どこだここ？」

月斗はいつの間にか暗い空間に居た。

部屋ではなく空間。どこまでも続いているように広がる闇の中に月斗は一人たっていた。

（もしかしてさっきまでののは夢で、俺はもう死んでてここは死の世界なんて落ちじゃないだろうな）

普通なら、今の状況を夢だと思うところだが、しっかりと覚醒している感覚があり、ただの夢には思えないでいた。

「やっと、見つけた」

「やつほーご主人様」

いつの間に来たのか月斗の傍には、フェルとファアが立っている。

「さっき渡し忘れたから、はいこれ」

「あげる」

フェルとファアの手には二人の髪の色と同じ銃が握られている。二人の手から、銃を受け取る。色が違う以外は特に違いは見当たらない。

「Five - seven。銃あるんだな。こっちの世界にも」

昔やったスパイの出てくるゲームに使ってきた銃。名前が気に入ったの記憶に残っていた。

「へー、銃って言うんだ。ご主人様の記憶に強く残ってたから、私たちの魔装はそれにしたの」

「嬉しい？」

「嬉しいけど、魔装って？」

「魔装は魔法をスムーズに発動するために使う増幅器のようなもの」
「つまりはご主人様のイメージをわかりやすく世界に伝えたり、力
ずくで世界を騙したりするときに使うの」

「ようはこれがあると魔法を使うのに便利って事か」

フェルとファーが来てから月斗は、現実か夢かを考えるのを忘れて
いた。

「私だと思って大事にしてね」

「実際、私達」

はにかみながら言うフェルとファー。

「ありがとう。大事にする」

ファーの言葉に軽い引つ掛かりを覚えたが、月斗は頷いた。

「そろそろ時間切れかな？」

「もう朝」

そう耳に届いた後、月斗の意識はまた消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4703z/>

双銃の異世界人

2011年12月21日02時52分発行